A-4

野外教育における東日本大震災復興支援の今後
ー心身の影響について 5 年間の継続調査の結果から述べられること ー

A report on five years of research on the physical and psychological health-benefits of outdoor education for children who suffered through the Great East Japan Earthquake

○島貫　織江（国立花山青少年自然の家）

キーワード：野外教育　復興支援　継続調査

1. はじめに

平成 23 年 3 月 11 日に起こった東日本大震災の人的被害は、現在も地元紙に毎日その数が掲載されており、平成 29 年 4 月 26 日現在では全国で 18,446 人（うち行方不明者 2,553 人）、その中の 99.6%が岩手・宮城・福島 3 県で、58%（10，770 人）が宮城県であった。また、子どもの被害についても宮城県は最多で 430 人（小学生 186 人、中学生 75 人、計 261 人）という記録もある。

国立青少年教育振興機構では平成 23 年 7 月～8 月に、福島県の被災後の子どもたちを対象に、心身の健全育成やリフレッシュを図るために、「リフレッシュ・キャンプ」を実施し、参加者を対象に、心身への影響等の実態を調べるとともに、それらがキャンプに参加したことでどのように変容したかを調べ、「リフレッシュ・キャンプへの参加後は、子どもたちの意欲が向上した」といった結果を報告した [1)]。

宮城県に立地する国立花山青少年自然の家では、平成24年度以降も引き続き、宮城県沿岸部の被災地域の子どもたちや福島県の子どもたちを対象とし、野外活動を中心としたプログラムを提供し、調査を実施してきた。震災から5年以上経過した現在もそれは継続しており、平成24年度から平成28年度5年間のデータの蓄積となった。

震災から5年以上経過した現在、参加者の学年によっては当時の記憶もほとんどないという反応もあり、どのような支援をしていくことが震災を経験した地域に住む子どもたちにとって必要なのかを模索している。実際、地域の教育関係者からは、仮設住宅を出ることができたからといって問題が解決されたわけではなく、むしろ、親の気持ちが不安定になって、それが子どもにも影響を及ぼしているケースがある、といった声も聞かれた。また、宮城県名取市に立地する大学に勤務する教員は、震災後に乳幼児期を過ごした子どもたちは、外遊びができなかったために、その時期に重要な自然の事物に触れる体験が欠乏しているのではないかと懸念していた。そのように、震災が子どもたちに及ぼす影響は未だに計り知れず、どのような教育支援がより効果的であるかを検討することは、5年間を経た今だからこそ必要であると考えた。さらに、「災害体験が子どもの発達を促すという積極的な側面」についての研究[2)]もあるように、震災の影響を様々な側面で捉えて、教育支援に活用していく視点は重要である。つまりそのように、震災を経験した地域に住む子どもたちだからこそ、受けるべき教育支援とより効果的な教育支援があるのではなかろうか。そして、そこに、野外教育が担う役割、野外教育ができるアプローチがあるように思われる。

したがって本研究では、平成24年度から平成28年度までの5年間、宮城県沿岸部の被

災地域の子どもたちを対象とした調査結果をまとめて分析し、現状を把握することで、子どもたちがここから、どのような力を育んでいったらよいか、そのためにはどのような教育支援が復興支援として適しているのかを検討する一資料となることを目指す。

2. 方法

1) 調査対象及び方法

①調査対象

国立花山青少年自然の家において、平成 24 年度～平成 28 年度に「東日本大震災復興支援事業」として実施したキャンプの参加者を対象とした。対象人数は以下のとおりである。

平成 24 年度 103 名、平成 25 年度 194 名、平成 26 年度 214 名、平成 27 年度 126 名、平成 28 年度 127 名

②調査内容

調査項目は平成 23 年度に報告があった「リフレッシュ・キャンプ参加者アンケート調査報告書」に示されていた身体や心の状態の変容に関する調査項目全 15 項目を用いた。

③調査方法

質問紙を用いた事前事後調査（プログラムが始まる前を事前、プログラム終了時を事後として調査を実施、その場で回収）

3. 結果および考察

図表に示したように、各年度の結果を見ると、平成 24 年度には、「いろいろなことにやる気がある」といった「無気力」についてキャンプ後に改善した。平成 25 年度には、「誰とも話したくない」といった「うつ反応」、「むしゃくしゃしてすぐかっとする」といった「精神的混乱」についてキャンプ後に改善した。平成 26 年度には、「無気力」、「うつ反応」、「精神的混乱」、「心配でイライラして落ち着かない」といった「不安反応」についてキャンプ後に改善した。平成 27 年度にも平成 26 年度同様の結果がみられた。しかし、平成 28 年度には、事前事後に「無気力」、「愛他性」、「うつ反応」、「精神的混乱」、「不安反応」いずれにも変化がみられなかった。なお、平成 28 年度には事業評価を目的とした調査も行っているが、「自分の気持ちだけでなく、場面を考えて行動している」、「初めて会った人も、すぐに友達になる」といった項目はキャンプ後に得点が向上し、そちらについては意識の変容がみられた。

以上のことから、現在震災を経験した地域に住む子どもたちにとって、心と体の状態について追究する意義が薄れてきたのではないかと捉えられる。それを受けて、今後どこに焦点を当てていくかを検討し、野外教育の役割を検証しながら実践と研究を進める。

4. 参考・引用文献

1)国立青少年教育振興機構(2011)「リフレッシュ・キャンプ」参加者アンケート調査報告書、14-20.

2) 安部芳絵(2014)東日本大震災を中高生はどう受けとめたのか：中高生のアイデンティティ発達の視点から、工学院大学研究論叢 (51-2)、73-87.

	H24				H25				H26				H27				H28			
カテゴリ	pre	post	t値	有意差	pre	post	t値	有意差	pre	post	t値	有意差	pre	post	t値	有意差	pre	post	t値	有意差
無気力	8.77	9.17	2.11	*	8.89	9.05	1.00	n.s.	8.57	9.29	4.91	***	8.72	9.24	2.93	***	9.11	9.29	1.12	n.s.
愛他性	8.84	9.18	1.61	n.s.	9.53	9.32	0.93	n.s.	9.19	9.30	0.82	n.s.	9.22	9.43	1.01	n.s.	9.60	9.74	0.84	n.s.
うつ反応	9.43	9.68	0.94	n.s.	9.46	9.81	2.19	*	9.62	9.99	2.17	*	9.42	10.13	3.87	***	9.77	10.04	1.35	n.s.
精神的混乱	8.98	9.41	1.85	n.s.	9.09	9.36	2.04	*	9.14	9.47	2.12	*	9.07	9.47	2.37	*	9.55	9.57	0.16	n.s.
不安反応	8.66	8.49	0.68	n.s.	8.65	8.53	0.80	n.s.	8.56	8.92	2.37	*	8.52	8.90	2.11	*	8.63	8.65	0.09	n.s.

***p<.001 **p<.01 *p<.05